

六月例会御案内 (平成二十年)

財団法人 協和協会

△会長 塩川 正十郎

○御案内

六月二十七日(金) 正午～二時半 参議院議員会館一階 第一会議室 (第五七九回)

講題 昭和後期十人の首相を論ずる — 岸信介総理から竹下登総理までの十名 —
講師 山岸一平先生(政治評論家、元日本経済新聞記者・政治部長、大阪本社代表、専務)
戦後の日本は、敗戦の焼け野原から立ち上がり、やがて世界第二の経済大国の地位を獲得するまでに至りました。それは、基本的には、未曾有の大戦を生き残った国民の努力によるわけですが、その日本国の舵取りをした時の総理たちにも負うところが大きかったといつてよいと思います。特に復興期の昭和三〇年から平成までの約三〇余年は、総理を初め政治指導者いろいろな毀誉褒貶もありましたが、なかなか個性溢れる人材が輩出したように思います。
そう考えていた折、日本経済新聞で政治部記者・政治部長、大阪本社代表、専務取締役等を勤めた山岸一平先生が、実際に接した、岸信介、池田勇人、佐藤栄作、田中角栄、三木武夫、福田赳夫、大平正芳、鈴木善幸、中曽根康弘、竹下登の一〇人の総理を中心に、その人物、政策について論じておられるのを知り、御講話いただくことにしました。奮っての御参加を!
(清原記)

◎ 当日の会費 四千元 (昼食の準備もあり、前日までに欠の御連絡をいただきました)

□御報告

去る五月二十八日の月例会は「日本外交のあり方——外交力の弱さはどこからくるのか」と題し、矢田部厚彦先生(駐ヴェトナム・駐オーストリア・駐ベルギー・駐フランス大使歴任)に御講話をいただきました。その概要は、ヨーロッパなどの外交は二、三千年の歴史を持つが、日本は、老中・松平定信が締結した通商条約から数えてわずか百五十年の歴史しかない。日本

はペリーの砲艦外交で開国したこともあり、そのやり方を踏襲して朝鮮や中国に開国を迫った。その結果が、大東亜戦争の大敗北であった。本来、国策としては、外交が主で戦争が従であるべきなのに、日本はそうした開国の経緯もあって、戦争が主で外交が従となってしまった。日露戦争で、高橋是清が英・仏へ出向きなんとか外債交渉に成功し、総司令官の大山巖元帥も奉天会戦で勝ったものの、日本の国力が限界であることを自覚し、小村寿太郎に自分が責任を持つからポーツマス条約を早く纏めるよう指示している。かくして、明治時代や大正時代には人材がいたが、満州事変・支那事変、大東亜戦争では、指導層にそれだけの人材が出なかった。いま軍事力のない日本は、外交で活路を見い出すほかなく、人材養成の必要を強調されました。

▽ 当(財)協和協会は、「各界の志ある指導者・経験者が、党派・利害・打算を超えて、真に国家的見地から、我が国立国の基礎をなす諸課題を検討して、世の中に貢献しよう」との趣旨にて、昭和四十九年、岸信介元総理によって創設された財団。第二代会長は福田赳夫元総理。第三代会長は櫻内義雄元衆議院議長、そして、平成十五年十月七日、塩川正十郎元財務大臣が会長に就任しております。なお、平成十四年夏から、理事長に、半田晴久が就任しております。会員は、政・財・官・学・民各界の有志がバランスよく集まっています。国会議員・同秘書は随時参加自由。この月例講話会のほか、内部には、十五ほどの専門的な部会・委員会があり、これまでに、政府へ提出した意見書・要請書は、百二十五本に達しております。

事務局電話(03) 3581-1192 専務理事兼事務局長・清原淳平、重田、高津、古瀬

◎ 添付のハガキ、または、FAXにて、前日までに、頭記月例会への御返信をいただきました。
▼ 事務局FAX(03) 3507-8587

御芳名

貴方様のFAX番号

六月二十七日(金) 出 欠 (いずれかに○印——昼食弁当を用意するためにも)